V-11　石巻市釜谷地区釜谷集落　　2012 年 12 月 22 日（土）

報 告 者 名　岡山　卓矢　　被調査者生年　1948 年（男）
調 査 者 名　岡山　卓矢　　被調査者属性　釜谷住民（V-11 話者）
補助調査者　土佐美菜実

被調査者（主な聞き書きは話者①から）

今月はムヨカ（6 日）ほど、長面の松原で遺体探しをしたが、このところは見つかるのがせいぜい鳥の骨くらい。今日は天気が悪くなったため、切り上げたところ。

田について

元は 7 反歩の田を持っていた。畑はない。この田は、作業を釜谷のある人に平成 15 年頃から全面委託していた。ここから多くて 12、3 袋（1 袋 30 キログラム）、平均 8 袋ほど取れた。

尾崎・長面・釜谷は、元の耕地と宅地を広く田にする計画で、平成 27 年頃までに整備を完了し、6～7 年後の営農再開を目指している。宅地のみ県の買い取りとなるらしい。しかし各戸が個人営農として再開するのを、この期間で可能か分からない。釜谷では数人が集落内の全水田を作業受託していたが、こうした受託者が皆津波で死んだ。農協や大川地区など、大きな単位でなら出来るかもしれないが、全て未定である。

針岡にある富士沼から引く富士川は田の用水だが、釜谷を通っているものの釜谷の人はこれを使えない。繋いでいると大雨の時に度々溢れたからで、富士川を放棄して釜谷沼に貯水した沢水を用水にした。釜谷沼の水が多い時は長面にわけることもあったが、渇水時に富士川を勝手に使って喧嘩になることは、平成に入ってからも度々あった。釜谷沼用水の範囲の土地改良区費は富士川のそれより高額である。

話者の家は漁業をしていない。漁業権を持っていた家は釜谷でごく僅かで、例えばしじみ漁も 1、2 戸くらいしかやっていなかった。

水神と稲荷神社について

稲荷神社例祭と同日に祀る水神は飲料用の水を祀ったものである。昭和 30 年頃、山から沢水を部落の水道に用いるようになった。水を貯めるタンクのところで稲荷神社例祭の日に同じく祭りをするが、このタンクも部落民が年に数百円ずつ出し合って維持している。ただし町の水道が通ってからは、こちらを使うという人は沢の水道維持費を支払っていない。祭りの日は、水神の祈祷をした宮司に供物を渡したり、その後交流会館で休憩に一杯やったりで神楽が遅れがちになる。すると水神の祈祷に行く親分（役員や総代）と若い者とで喧嘩になることもあった。

津波までずっと神楽は続けられていたものの、釜谷の舞い手は最後は 2 人だか 1 人になり、彼らも年でやめた。ただこの 1 人は震災後に長面の祭りで踊ったらしい。神楽を一緒にする尾崎の祭りは 4～5 月頃、長面は 10 月 25 日、釜谷は 10 月 19 日と日が違うので、それぞれ舞い手が重なることなく神楽を出来る。ただし近年は尾崎も舞い手がいなくなり、長面に 1 人いるかどうかなので、同じ舞いである北上町･女川町の神楽の舞い手を頼んでいた。話者の父は神楽をしていて、話者も若い頃に他の若手達と一時 30 人近く神楽を習いはじめたが、先生をしにきた雄勝のものがあれこれ文句を言うのでやかましくて辞めた。その時の若手も最後まで神楽を続けたのは 1 人で、それが先の長面で踊った男である。

圃場整備について

釜谷の人の耕地は長面や針岡はじめ、数カ所にポツポツと点在している。こうした部落外の田を集めるため、近年圃場整備を進めていた。なお話者の持ち田はこの整備によって増減する予定はなかった。津波の少し前に釜谷の圃場整備は完了しており、土地の分配をする寸前だった。

ヨシガリについて

中学の頃、昭和36～37年頃まで父がヨシガリをしていた。最盛期は昭和30年頃。北上川の中洲のヨシを刈るが、これに参加出来るのは各戸から1人までである。ヨシガリのクチアキ（口開け）は、中洲内の区域を移動して3回だか4回開かれる。期間は7月末から8月頭頃までで、背が高いヨシに囲まれるため中洲は相当暑い。クチアキは日にちが毎年決まっていたようで、その1つは8月1日か2日である。これは石巻の川開き祭りと同日のため、この宣伝を見ると「ああヨシガリだな」と思うものだったため覚えている。

当時は鎌を使った手刈りで、ヨーイドンで一斉に舟を漕ぎ出して中洲へ向かう。話者は子供だったため、堤防へ行く頃にはクチアキが始まっていることが多く、ヨーイドンは1度しか見たことがない。この号令は部落の年長の偉い人が掛けていたようである。舟が無い人は他の人に乗せてもらい2人1組でカヤを刈るなどするが、その場合は、舟にカヤ積み込む者と、舟を漕ぎ堤防へ運ぶ者とに分担して作業する。皆それぞれ良いカヤ生えた場所を目指す。カヤがよく密集した場所で刈るのとそうでないのとでは効率がかなり違い、また上手い下手でも収穫量に大きく差が出る。刈れない人はまるきり刈れないものである。クチアキ前夜には鎌を研いで備え、当日は切れにくくなった時のために鎌を2丁用意して臨む人もいた。

家族は堤防の上に簡単な小屋を掛けて日よけにし、その中で運んだカヤの葉を剥く作業をする。小屋内部は3畳ほどと狭く、妻数人とか、子供が4、5人とか入れるだけである。親指と人差し指に自転車のチューブを切ったものを嵌め、しごいて葉を剥く。カヤの先端近くの葉を2、3枚ばかり残して、残りは取って出荷するからである。葉が乾くと、捻れて剥けなくなるため素早くこの作業をする必要があり、カヤに水を掛けながら剥いたり、あるいは分担して川の中で水に浸かりながら剥くこともあった。仲の良い者同士同じ小屋に入ることもあるが、作業はそれぞれ自分の家のカヤを剥く。中には小屋を建てず自宅へ持っていき作業した人もいるだろうが、堤防には小屋が多数並び、アイスキャンデー屋が売りにきたのを子供の頃に買って貰ったことがある。クチアキが終わるまで小屋は建てたままにしておき、期間中これを使う。話者は中学生になった頃からは小屋でなく、川の中で葉を剥く作業や、舟で堤防まで運ばれたカヤを小屋へ運ぶ作業を手伝うようになった。

昼前くらいまでが刈って良い時間だったように覚えている。朝早く始まり、帰る時には父はフラフラになっていたものだ。水を飲みに行くことも出来ないので、一升瓶に水を持参して臨むが、中にはヨシガリ中で倒れたり迷子になる人もある。クチアキが終わると父は冷たい水を飲みたがって、観音寺の井戸水が冷たいのでよくこれを汲みに行かされた。観音寺の井戸は寺のものなので、他の人も使って良いのである。

ヨシガリに参加するのは男女どちらでもよい。出稼ぎが盛んになると、妻がヨシガリに出る家が多くなり、話者の父母もそうなった。話者宅代表で母が、叔父宅代表で叔母が参加したこともあったが、2人組になって同じ舟で参加したものの舟を漕ぐのが下手だった。舟の同じ側を漕ぐのでクルクル回るばかりで、河岸から中洲まですら辿り着けず諦めた。刈ったヨシはリヤカーなどで家へ運び、束ねて乾燥させたのち、生産組合へ卸す。生産組合はこれをノリズ（海苔簀）向けに、近隣の海苔生産地へ出荷した。1尺四方くらいの大きさのノリズにあわせて、ヨシの寸法を合わせてオシギリ（押し切り）という裁断機で切り揃える。切ったうち先端側の細いものがノリズ用に売り物となる。これを出荷用の決まった太さ（話者は直径10センチほどを示した）に束ね、各戸の家先に干す。このためこの時期は学校前の道には家々の前に干したカヤがズラッと並んだもので、何マルキあるかでどの家がいくらカヤを取ったか見て分かるものだった。西の方から雷がなると、雨で濡れないよう皆急いで取り込んだ。

先端をとった根元部分のカヤは、太いためノリズにならない。この部分を集めたのをアツメカヤといって、編んで屏風のように砂どめに使った。長面の松原と平地の境に立てていたようで、長面分になる土地であるが、どういった経緯でそうしていたかは分からない。

屋根について

昭和30年代は茅葺き屋根の家が多く見られ、話者宅も茅葺きだった。サシガヤで継ぎ足しながら住んだ。同じ頃、杉皮葺きの家・スレート屋根の家も多かったが、特に杉皮はトタンに代わっていった。

釜谷にいた農家以外の家

昔はお侍がいたと聞いており、どこからか逃げてきた人だそうだが、その子孫の家というのは聞かない。また入屋敷には医者がいたそうである。

話者の家について

運転免許をとるにあたり戸籍を見て知ったが、現住所は韮島なのに本籍地は旧診療所近辺だった。その辺りは親類が多く、元はそこに住んでいたのが、酒で借金をつくったせいで元の土地を取られて富士川沿いに移ったようだ。

農耕牛について

以前、田で使うのに牛を1頭飼っていた。小学3〜4年生からハナドリをして田を手伝った。牛の鼻に竹を通したのを持って、犂を引く牛を歩かせるのだが、足をまくって裸足で行うので寒い。牛は、朝から仕事をさせると午後3時くらいには飽きるものである。このため昼を過ぎると仕事をやめさせて草刈りをして食わせる。草がない冬は、藁にホシクサを混ぜたものを食わせる。藁は、話者宅の7反歩の稲わらを全てニオにして積んでおき、5センチくらいに刻んで使う。ホシクサは大根の葉などを干したものである。話者宅ではニオが3つ4つ作れたが、食わせるには余るので、残りは牛小屋の敷き藁にする。敷き藁は踏まれて堆肥になる。また、餌と敷き藁にしても残った藁は、ナワ屋がこれを買い付けにくるので売った。当時は釜谷にもバクロウがいて、年取った牛を引き取り、子牛に替えてくれた。

牛乳をとる家もあって、例えば屋号牛乳屋では3頭ほど飼って、毎朝話者が学校へ行く頃に乳搾りをしていた。

馬は覚えている限りでは、釜谷に2、3頭しかいなかった。父は終戦で退役したあと、もらう物がなにも無かったので軍馬を連れて帰ってきた。途中までは貨物車などに馬ごとのせて貰って帰ったが、途中からはこの馬に乗って帰ったそうだ。話者が小さい頃には馬はもうおらず、家にたくさん馬用の蹄鉄があったのを知っているだけである。

話者が中学生の頃には釜谷に5〜60頭の牛が買われていて、ほとんどが農耕用に一戸1頭飼っていた牛だったが、農繁期以外にはこれらをまとめて1日遊ばせる牛番という仕事をした。牛番は、釜谷の牛を飼う家々が2軒ずつ交代でこれにあたる。牛番にあたると、その2軒は大人でも子供のでもよいので一人ずつ人を出し合い、北上川土手で放し飼いにしてある牛を16時頃までに現北上川大橋の付近へ集める。あとは各戸が自宅の牛小屋へ連れ帰るのだが、牛が居ないと思うと勝手に家へ帰っていたり、とんでもないところへ逃げていたりして大変だった。特に引き潮時に中洲へ渡っていたりすると困るものであった。また夏にカヤを干している頃などは、放っておくとカヤを食いに全ての牛が向かうので、一日中これをブクワねばならない（追い払わねばならない）。こうして日中も仕事があるので、牛番にあたると学校も休ませてくれた。よく学校も許したものだと思う。またこうした牛番の時は学校で仲の良い友人たちも、よく手伝いに集まってくれ遊んだ。

田植えについて

田植えを手でした頃は、その時期は学校も田植え休みになって子供も働いた。田植えを手伝いに来てくれる顔ぶれはほとんど決まっていて、毎年同じような人が集まる。皆、腰にタモを括り付けてこれに苗を入れて作業するが、苗が無くなった人にこれを補給するのは子供の仕事である。幼くて田植えが出来ない歳の子供は、畦からこうした人へ苗を投げ渡す役をするのである。

田植えの手伝いをしてくれるのは、イトコ・隣組・遠方の親類などである。相手によって、毎年ユイで手伝い合う場合、米か金で給料を出して働いてもらう場合がある。1〜1.5町歩の田植えをする場合、20人ちょっとの田植

え用の人足が必要である。話者の家では、針岡にある母の実家へ毎年手伝いにいった。他から手伝いを頼まれても、日取りはこの実家を優先していた。またこの家には秋の稲刈りも手伝いに行っていた。泊りがけで、夜に大黒舞を親戚が踊っていた覚えがある。

苗代は、水田内の一部を使って作り、苗代田をつくるようなことはしない。話者の家は 7 反歩の田を持っていたが、いざ田植えの時に足りないということがないよう、8 反歩分の苗を作っていた。

初午について

仙台放送作成の DVD で初午の水被りをしていたのは自分である。新婚の婿がいればそいつに決まるのだが、それも居なかったので、当日の日待ちで酒を飲んでる最中に自分に決まった。はじめは誰が水被りをするか、皆嫌がって決まらなかったが、80 歳くらいの親分に「こういうわけだから、しないか」「（水被りする者は）今日 1 日神さんなんだから、やれ」と乗せられ引き受けた。よくよく他の講がどうだったか聞けば、よそは若い者でくじびきだったそうでふざけるなと思った。大川小の先生が志願し 4 人で水被りをした年もあった。その先生は次の初午もやりたがったが、1 度したら 2 度目の水被りをやるのは縁起が悪いとされ駄目だった。映像はまわし（褌）姿だが、この回から丁度まわしをすることになった。以前はパンツの上にまわしだったのだが。中には寒いだろうとぬるま湯を出していた家もあったが、それまでずっと冷たい水で慣れていたいたのが、かえって冷えて辛くなった。また酒も飲まないでおいた方が寒くないのだが、皆始まる前は教えてくれない。初午は早く終わらすため走って次々水を浴びるものだが、テレビの取材も多いのであまり速すぎてもいけないといわれる。大通り沿いを 3 列のバケツが毎戸前に並び、3 講代表がそれぞれ浴びるとのやり方になったのは昭和 59 年頃だったか、撮影が来ているのにあわせてのことである。その前にあった初午が、1 人が町裏のルートを走ったところでカメラが混乱してしまい、可哀想だったから変更されたのである。昼前くらいには町の端まで行き着いて終わる。どこと決まっているわけでないが、初午が終わるあたりの家が風呂に入れてくれ、そこへ着る物と酒が届けられ休む。話者のあと現在までに 2〜3 回は初午があったはずである。

出稼ぎについて

昭和 35 年のチリ地震の津波で、雄勝は狭く低い土地なので被害を受けた。その後嵩上げ工事が始まると、ここで出稼ぎをする人がここらでは多くいた。当時中学生だった話者もここで出稼ぎを何か月かしたが、一日 500 円にならない労賃だった。その後同 37〜8 年は東京オリンピックに合わせた工事が多くあり、話者も 10 人くらいで連れ立ってこの出稼ぎへ行った。こっちで日雇いで働く場合の 3〜4 人分もの給料が貰えた。盆正月は金になる現場の情報交換の場だった。横浜がいい、どこそこがいいと聞けば今抱えていた現場をぴらりと辞めてそちらで働いた。帰省が終わると石巻から 23 時発の上野行きへ乗るのだが、これが嫌だった。昭和 45 年には飲み食いする金をいれてトントンくらいの給料にしかならなくなり、辞めて女川の水産加工会社の職員送迎を始めた。針岡など近隣の女の人達を乗せて送り迎えし、自分も冷凍庫内で働くというもので、7 年務めた。その後は土木の現場仕事など色々な職に就いた。

写真 1　石碑の修復